

還幸、

〔修學院御幸書〕日吉の山のふもと、修學院の御茶屋は、後水尾院法皇始て御幸ましく、靈元院法皇もまたまばく、行幸なりしおとなり、享保十七年、靈元法皇かくれさせましく、ける後は、星霜百年計、荒廢して行幸も絶たりしを、文政六年の秋、武家より新に修理を命じ玉ひ、舊貫に復して是を奉らしめ給ふ、さるによて、文政七年九月廿一日、太上皇格はじめて御幸なる、御道筋は、清和院御門を出て、升がたにいたり、賀茂川をわたり、新田山ばなを御小休の所とす、萬民歡呼して、萬歳を唱へ、ちまたにみちてをがみ奉る、げにありがたき御代にてぞありける、

修學院御幸之儀

御所裝束如常、但寢殿南面廂、御簾悉垂之、母屋御簾悉卷之、晝御座上舖東京錦御茵、廂西第二間舖小紋疊一帖中南北、爲關白座、入夜時掌灯以下如常、刻限上達部雲客以下參集、執事別當著公卿座、奉行院司覽日時勘文、但今度兼日依御覽無此儀、奉行藏人、召御沓居柳筥臨時、置日給辛櫃上臨時、出御時給、次昇立御輿於門內南北、奉行院司、申事具之由、上皇出御寢殿簾中、次陰陽頭奉仕御身固、經西透渡廊、入寢殿西南妻戸奉仕之、次御隨身等、渡廊東進候南階北、殿上人列立中門外東上、公卿列立南庭北、次寄御輿於南階此間殿上人、次隆起朝臣參進給御劔自階間簾下、次上皇出御關白候御簾、此間公卿跪地、次乘御、御隨身等發前聲、次隆起朝臣、召上臈御隨身於階下、從階上授御劔、下殿、次公卿次第離列前行、於門外騎馬、執事大臣猶前行、次御輿出御自中門邊、顯孝朝臣等、於西中門四脚門等、御隨身等進御、前行列殿上人騎馬二行爲先、下臈、但次公卿騎馬一行爲先、下臈、次上臈御隨身爲先、下臈、次御輿位次上臈持御、次廳官持御沓居柳、雨皮持二行、次御傘、次下臈御隨身爲先、下臈、次後騎御厩別當、次召次六人二行、次御後官人、次上北面四人二行、次下北面十二人二行、位次上臈、次所衆二人二行、次御衣辛櫃、廳官一人添之、次關白、於總門外六位判官代騎馬、次入御御休幕御隨身先發、前聲、先